

本日の問題設定、ペスタロッチャーの理論は今日の教育問題の解決になお有効といえるかに対して nein, 無効であるという立場をとりたい。絶対的なものとして、ペスタロッチャーを使えば何でも解決出来るんだといった意味で、ペスタロッチャーを崇める、あるいは偶像化するということでは、nein ではないか、無効ではないかと問題提起した上で、aber, けれども、こうすればということをつけ加えていきたい。本日は特に最近の学校教育の問題として、体罰の問題が浮上しているので、これをとりあげていきたい。

まず、体罰に関するペスタロッチャーの見解と今日の体罰問題ということで、ペスタロッチャーの体罰に対する見解として、『シュタンツだより』をとりあげたい。ペスタロッチャーは、シュタンツで生涯初めて、自覚的に教師として赴任して実践を行った。この著作では、教育愛について述べられており、読んで大変感動するのであるが、この体罰のところをとりあげると、どうもペスタロッチャーは体罰を完全否定していない、条件付きではあるが肯定をしていると読みとれる。その条件をまとめると、「子どもの目に教師の行為が愛情あふれる真実なものとして映っている場合」、「教師が子どもに対して愛情をもっていること」、「教師が子どもと家庭生活のような関わりをもっていること」があげられている。こういう条件付きであるが、教師と子どもの信頼関係、あるいは愛情関係があれば、体罰もやむなし、という形で肯定しているという風に読みとることができるわけである。これを今日の体罰問題と関係させて、読んでいきたいと思う。

今日の体罰問題として、1990年の毎日新聞に掲載された、福岡市の老岐中学校で実際に起きた、生き埋め体罰事件をとりあげたい。この事件の当事者の教師の方の釈明のところを見てみると、「立ち直らせたさの余り…」と、書いてある。教師側からは、「あの二人は二度も事件を起こしており、またやったのかと歯がゆかった。これだけ心配しているのにとせつなくなり、体でぶつかって指導しなければ、と思ってやった。客観的に見たらおかしいと思われるかもしれないが、教師として生徒を立ち直らせたいという気持ちだった。間違っ

ことをしたとは思わない」という発言が出ている。

この生き埋め事件は極端な例ではあるが、体罰の問題が出た時の教師側の意見として出てくるのは、だいたい「子どもに立ち直って欲しいとの愛情からの指導である」、あるいは「教育熱心であるがゆえにおこなった指導である」、ということであるといえる。

そこでペスタロッチャーの理論をそのまま今日に通用する場合のこわさとして、ペスタロッチャーが言っている言葉をそのまま使った場合に、体罰をしても仕方がないと、肯定論の方に使われる危険性があるのではないかということをあげ、このことをペスタロッチャーをそのまま現代に適用した場合には、ペスタロッチャーの理論は無効ではないかという方の、問題提起とさせていただきたい。

次に、ではペスタロッチャーはもはや時代遅れで古くさいものだと、捨て去ってしまって良いのだろうかという観点から、もう少しひねった提起をさせていただきたい。確かにそのまま、その言葉のまま現状肯定に使っていけばそうかもしれない、でもそれは本当にペスタロッチャーが言いたかったことなのだろうか、もう少し深読みしてみたい。

現在のペスタロッチャー研究について、世界的な動向として、新しい提案が生まれてきている。ここではその中のふたつ、シュタッドラーによる『ペスタロッチャー』と、オスターヴァルダーによる、『ペスタロッチャー—教育的崇拜』を紹介したい。この両者に共通するのは、ペスタロッチャーの偶像化に対する批判であるということである。ペスタロッチャーは、確かに一定の歴史的な貢献をしており、教育学に対して重要な貢献をしている。でもだからペスタロッチャーは優れている、英雄である、絶対に間違いのない存在であると偶像化するのではなく、そういう偶像化からペスタロッチャーを救い出そうという流れにあると言えると思う。

その意味で今日、ペスタロッチャー研究においては、方法論の確立が求められてきている。大きな流れでいうと、ペスタロッチャーを無条件に賛美する時代は終わったとし、「政治的、社会的、経済的、哲学的、宗教的、神学的文脈」というものを考慮にいれて、ペスタロッチャーの人と業績というものを、歴史の中で相対化して、批判的に吟味しようとする傾向が強くなってきているというこ

と言える。

この観点から体罰論を読み直してみると、シュタンツ孤児院の歴史的状況と
いうのがある。政治的には、フランス軍によって焼き討ちにされた反革命的気
運の強い村の子どもたちを収容している。宗教的には、カトリックが非常に強
い、非常に保守的な土地柄であり、そこにプロテスタントであるペスタロッ
チーが赴任しているという状況がある。収容された子どもの性質としては、
文字も読めないどころか、病気を持っている子どもが多い、知的な遅れが
ある子どもが多い、そういう子どもたちの前で、ペスタロッチーが孤軍奮
闘していたわけである。

そういうふうに読むと、確かにペスタロッチーは体罰を条件付きではあるが
肯定しているが、果して体罰そのものを肯定していたのかと疑問が生じる。
むしろ、子どもの発達可能性、子どもは必ず変わるという信念への肯定だ
ったのではないかと思える。宗教的に違っていても、政治的な反対がある
ところでも、子どもの発達可能性というもの、これに対して働きかければ、
子どもは必ず変わってくれるという情熱、そういうものを示しているの
ではないかと読めるわけである。

こういう点から考えると、言葉だけでみると体罰を肯定しているようにみ
えるけれども、ペスタロッチーが提起しているのは、社会的状況も個人的
状況も含めて、子どもの状況を判断する知性という意味でのマクロな視
点、それと子どもの発達可能性にかけていく情熱という意味でのミクロ
の視点、これらの統合としての教育愛というものではないか、そう読める
といえる。

結論として、ペスタロッチーの理論を歴史的な文脈に照らして、時代
の中で批判的に吟味することなくそのまま現代に適用し、現代の教育問
題を解決するよすがとした場合には、ペスタロッチーの理論は現代の
教育問題の解決に寄与し得ないのではないか、と。しかし、ペスタ
ロッチーの時代の歴史的な文脈との関連で、彼の理論を批判的に吟
味し、その時代的意義において、彼が何をしようとしたのか、何を
求めたのか、それを抽出していくならば、現代の教育問題に対しても、
原理的な視点を提供してくれるのではないかと考えている。